



タマネギの菌糸腐敗病菌による 苗立枯症状について

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 **いけ だ さち こ**
道南農業試験場 **池 田 幸 子**

はじめに

北海道は日本のタマネギ生産量の60%を担っている大生産地で、特に北見～網走地方に大規模な生産圃場がある。2017年5月、圃場に移植した直後のタマネギ苗が突然立ち枯れ始め、この地方の合計30haで立枯症状が発生し、被害の大きい圃場では廃耕となった。北海道立総合研究機構北見農業試験場でこの件を調査したところ、菌糸腐敗病菌 *Botrytis byssoidea* によるものと判明した (IKEDA and YASUOKA, 2023)。本菌は白斑葉枯病の原因菌の1種であるほか (松尾, 1977)、タマネギの収穫期直前ころに茎葉から感染し、収穫後貯蔵中に鱗茎を腐敗させることが知られているが (石坂, 1983)、苗立枯症状については未知の症状であった。そこで症状や感染経路、発病好適条件等について調査を行った。

I 菌糸腐敗病菌による苗立枯症状と圃場における発生状況

2017年5月、北見～網走地方で移植直後に立枯症状を

呈した株を観察すると、地際部から茎盤にかけて乾腐症状と黒色の菌核がかさぶた状に張り付いていた (図-1)。茎盤が乾腐していても根は白く健全に見えた。

2018年5月に北海道北見市内の露地圃場 (品種‘オホーツク222’) で菌糸腐敗病菌による苗立枯症状が発生したため、経時的に発生状況を観察した。その結果、散発的な発生をする場所もあったが、2畝ずつ発生する傾向が認められた (図-2)。また、立枯症状に至るまでに黄化や生育不良が認められ、6月上旬までにそれらの症状が認められた株はやがて立枯症状を呈し、7月上旬には消失した。その一方、6月上旬以降発生が拡大することはなかった。

II 感染源

菌糸腐敗病は、タマネギ生育期終盤の立毛中の茎葉から原因菌が感染することで引き起こされる (石坂, 1983)。また、*Botrytis* 属菌は土壌内で腐生生活や越冬をしているが、空気伝染性植物病原菌として知られており、既報からは土壌伝染性という認識はないとかがえる (松

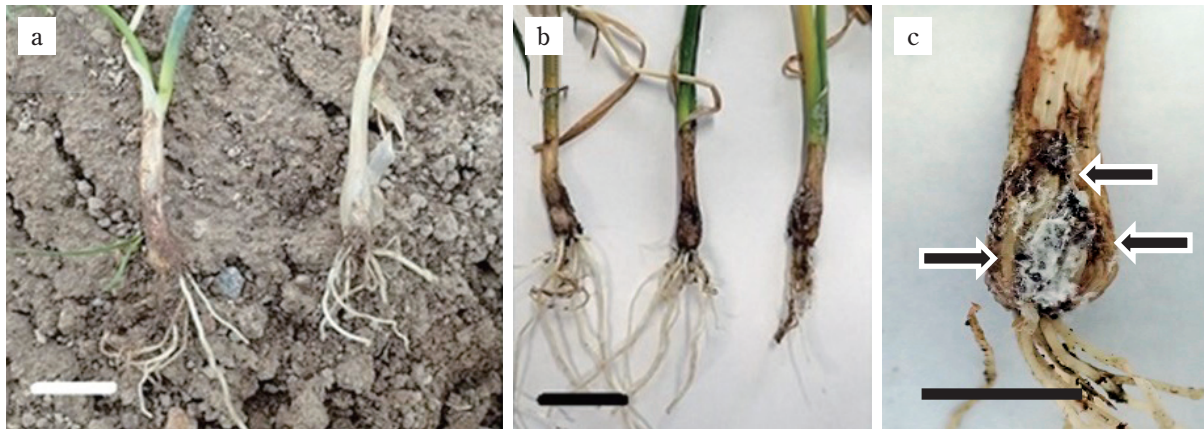


図-1 タマネギ苗の早期立枯症状 (IKEDA and YASUOKA, 2023)

a: 発生圃場における立枯症状。茎盤から茎葉下部に乾腐症状が認められる。バーは3cm。

b: 水洗した立枯株。根部は白く発病が認められない。バーは3cm。

c: 乾腐症状を呈している部分には白い菌糸とともにかさぶた状の菌核 (矢印) が付着している。バーは1cm。

Damping-off of Onion Caused by Soilborne *Botrytis byssoidea* Infection. By Sachiko IKEDA

(キーワード: *Botrytis byssoidea*, 苗立枯症状, タマネギ, 土壌伝染)